

新渡戸稲造「新渡戸稲造書簡」昭和2（1927）年7月16日

北米遊説記ゆうせいきを讀みて

新渡戸稲造

僕のジュネーブ 寿府 在職中幾多の米国人に会ふたが其中で鶴見君の米国に於ける活動振りを語らぬ者は尠かつた。又僕は之を聞くことを以て大々の満足とした。たゞ聞く毎に一つの心配と一つの希望があつた。前者は君の健康に關することであつた。後者は君が後継者を得んことであつた。

我が同胞は動ややもすれば海外に在りて邦家のために力を致す人士の労を認めない。否却て彼等を誹謗するのが通

則である。自ら成さんと欲すれとも成し能あたはさるやから輩は成功を嫉み、自ら成すべき位置にありて成さざる者は自己の功を奪はれたるを恨み、一般社会は海外の奉仕の如何なるものかを知らぬ。

外国働きをする者は単に才能や手腕に長する丈けでは事

足らぬ。心中しんちゆう 確信と犠牲と奉仕の念の強きを欠くべからざる条件とする。而して鶴見君は自分の主張を確信し、安逸と健康

を犠牲とし、邦家と正義の為に奉仕せんと決心して事に當つた。君の苦心は察するに余りあると同時に、君の成功は当然の結果である。聞く所によれば、君は長い日月に渉る滞米中の実見と經驗を

公けにする由よし。これぞ必らず同君の後継者を示導するに足るものならんと思ふ。僕はその書の出つるを鶴首しつゝ待つ

軽井沢

新渡戸稲造

七月十六日